

## ●曲目解説●

“シンフォニア”とは、その言葉から予想されるとおり、“シンフォニー（交響曲）”の基となったものです。しかし、その趣は交響曲とはいささか異なったものです。その初めの形は、“カンタータ（多楽章の声楽曲）”の前奏として器楽だけで演奏される楽章を指し、それがやがて、独立した多楽章の器楽合奏曲へと発展し、交響曲という形式が完成していくのです。J. S バッハにあっては、彼自身の協奏曲などが転用されています。今夜演奏する曲は、おそらく今は失われた、オーボエとファゴットを独奏楽器とする合奏協奏曲の第1楽章だったのではないかと想像されます。

モーリス・ラヴェル（1875～1937）は、生涯独身を通し、自分の子供はいなかったけれど、無類の子供好きでした。知り合いのゴデブスキー夫妻の二人の子供、ジャンとマリーを殊の外かわいがり、しばしば一緒に遊びました。ラヴェルがこの子供たちのために作曲したのがピアノ連弾のための組曲「マ・メール・ロア」です。1910年に初演されたこの曲は翌年オーケストラ用に編曲されます。さらに、テアトル・デ・ザールの支配人ジャック・ルーシュの依頼によりバレエ音楽として増補されます。今夜演奏するのは、前奏や間奏を付け加えたこのバレエ版です。「マ・メール・ロア」のピアノ原曲は、子供のために作曲されたので、ピアノのテクニックも平易で、オクターヴさえ使われていません。『自伝的素描』でラヴェル自身が、「この曲で子供の頃の詩情を呼び戻したいという願いは、当然、作曲の手法を簡素化し、書法をむきだしにすることとなった」と、述べています。子供にも弾けるようにという制約のなかにあつて、おとぎ話に題材を採ったこの曲はラヴェルの個性が打ち出された繊細な傑作です。（「マ・メール・ロア」は、英語では「マザー・グース」となります。）なお、バレエ版は、短い間奏をはさみ切れ目なしに演奏されます。

エルネスト・ショーソンは、セザール・フランクの門下生でしたが、不幸にも1844年、まだ44歳の若さで、自転車事故のためにこの世を去ってしまいます。彼の作品の特徴は抒情的なメロディーにあつて、それは特にピアノ四重奏曲イ長調によく表れています。今夜演奏する「交響曲変ロ長調」は、彼の手になる唯一の交響曲ですが、ショーソンの持ち味である一種ほの暗い甘美さ、世紀末のメランコリーをよく表しています。反面、力強く、気迫のこもった作品でもあります。師フランクの名作「交響曲ニ短調」に倣って、交響曲には珍しく3楽章制を採っていて、フランクの作品を思わせる部分が随所に現れているのも目を引くところです。ただ、第1楽章や、特に第3楽章にドヴォルザークの「新世界交響曲」の旋律にそっくりな部分が出てきますが、「新世界」の初演は1893年、ショーソンの交響曲の完成はその三年前、1890年です。決して「新世界」の模倣ではありえません。ショーソンの名誉のため、あえて一言。